

面倒な相棒 前編

平成 23 年 11 月 6 日(日)

幻想譚工房

「はじめまして、今日から文月のメンテナンスを担当することになりましたクヴァレです」

初夏の暑い日に『相棒』はやってきた。

淡々と挨拶を述べると、彼は静かにあたりを見回す。緑色の髪は森のように深く、琥珀のような金色の瞳は静かに揺れていた。物静かながら、内に強いものを秘めていることは目をみてすぐにわかった。

「わお、ハンサムじゃない」

親友のソフィアがクヴァレを見るなり真っ先に彼の元へと駆け寄った。彼女は私のサポート担当でもあり、今日新しく整備担当が入ってくると聞いて朝から楽しみにしてたのだ。

……ただ惚れっぽいところがあり、どういう意図で掛け寄ったのかは分からないが。

ソフィアはクヴァレの前に立ちどまると、行儀良くスカートを広げてお辞儀した。育ちの良いソフィアだが、いつもよりさらに丁寧なお嬢様モード。ということは少しは下心もあるということか？

「はじめまして、私はソフィアと申しますの。お会いできて光栄ですわ……とここでクヴァレさん——」

「僕の事はいいから、文月さんのところへ案内してもらえますか？」

ソフィアをばっさりと切って本題に入ろうとするクヴァレに、ソフィアは少し不満な顔をしながらも私の方向に手を向けた。

「……あちらにいるのがふみちゃんですわ、私も彼女のサポートを担当してますの」

「そうでしたか、これは失礼。どうぞよろしく」

ころりと態度を変えたクヴァレはあっけに取られているソフィアと握手すると、まっすぐこっちに歩いてきた。

私たちはエインセルの中でも特に暴力というものに長けたプロジェクトの一員である。本来は主亡き後の惑星ピアンカをより詳しく調査するために結成されたチームだったが、とある事件が原因で人類が言うところの「特殊部隊」が必要になった。上層部が提示したスペックに最も近い調整を受けていたのが私たちだったということだ。

ところでプロジェクトのメンバーがどんどん調整を始める中、私だけは他のメ

ンバーと違って大型の装備をたくさん使うため、身体の他により兵器について詳しい軍医科からエキスパートが来ることになっていた。それがクヴァレだ。他のメンバーに遅れやっとな活動を始めると楽しみに待っていた相手が厄介そうな人だった。仕事だからと割り切っている、がっかりする気持ちは大きかった。

「何なのよあの人はい」

顔合わせを済ませた私たちは、少し間を置いてから自分らに割り当てられた調整室に集合することになったが、ソフィアはクヴァレと分かれてからずっと悪態をついていた。

ソフィアが怒るのも無理はない。私が同じ立場だったらやっぱり怒っただろう。

「私の話を遮ったかと思えば、ふみちゃんの担当者だと知った途端態度を変えるなんて、信じられないわっ」

ソフィアの声が響きわたり、談笑していた他のメンバーが一斉にこっちを見る。ソフィアは周りの目も気にせずカフェオレをぐっと飲み干した。そんなソフィアの背後から、同年代くらいの女の子の人が近づいてきた。

「一体どうしたのよ、わんこ」

「べ……卯月さん、こんにちは」

ソフィアがぎょっとして振り返る。卯月はその名前通り私より早くメンバーに選ばれて調整を受けていた一人だ。年が近いのでメンバーの中ではソフィアの次によく話す相手が卯月である。

自由奔放な性格で、何かにつけて人に対して動物にちなんだあだ名をつけたがり、私の事を亀ちゃん、ソフィアをわんこと呼んでいる。これがなかなかきちり人の特徴を押さえているものだから、初めは反発していたがいつの間にか周りの人も言い出すようになり、しまいには定着してしまった。そんな卯月はソフィア含む数人から裏でペリカンと呼ばれている。

「ずいぶんご機嫌斜めじゃない？ 今日新しい人が来るって言ってなかったっけ」

「それが失礼な方ですの、これから会うというだけで憂鬱ですわ」

「でも腕は確かだって聞いているわよ」

「腕がよくても、心が伴っていませんと……」

ソフィアが空のカップを置いて深いため息をついた。

「それで、亀ちゃんはどう思っているの？」

「……確かに面倒で厄介そうな相手だが、まだ何も分からないから様子を見て決めようと思う」

「まあ、吉報を期待してるわ」

卯月と別れると、ソフィアを引っ張りながら制御室へ向かった。

……面倒はその直後から早くも立ちはだかった。

「じゃあまず全ての装備品の特性を測るから、装備と装甲、他身につけているものを服以外で全て外してくれ、そしたら今日はもう帰って良いぞ」

「……は？」

突然の意味不明な指示に啞然となる。

「何か不満か？」

「言ってる意味がよく分からないんだが。帰れ、とはどういうことだ？」

「ちょっと言葉がきつ過ぎたか、文月は今日点検の必要がないから好きにしていってくれ」

「だからどうして点検の必要が無いんだ？ 身につけたままだってできるだろう」

他のメンバーは基本的に装着品を身につけたまま調整を行っていた、その方が全体的なバランスを合わせやすいからだ。私も当然そのつもりでいたのでクヴァレの言い分が納得できなかった。

「文月、君は他のメンバーと同じように点検をすることは難しいんだ。なぜなら君は他のメンバーでは考えられない量や規模の大型装備を抱えて活動する。それら全ての相互作用を調べる前に、装備が正しく動くか点検する必要がある」

「それは分かった……でも」

「どうした？」

「帰れと言うことはないだろう、何か手伝えることがあるんじゃないか？」

出番は無くてもチームとして仲良くしたい、そう思ったが、クヴァレは下を向いて言った。

「すまない……今日一日で終わらせるために集中したいんだ」

「なっ」

「それじゃあまるで私たちが邪魔者みたいに聞こえますわ」

ソフィアがたまらず声を上げた。

「……そう取ってくれても構わない。それとソフィア、君もそのレーダーを置いて行ってくれ」

「分かりましたわ、それではあなたは私たちより大事な機械を磨いててくださいいな」

そう言うと、ソフィアは帽子をクヴァレに投げつけて出て行った。

「さあ、ふみちゃんも行きますわよ」

「あ、あぁ」

装備を外してクヴァレの近くに置くと、急いでソフィアを追いかける。入り口

付近で振り返ったがクヴァレは下を向いたままだった。

「まったく、失礼な人ですわ」

結局することのなくなってしまった私たちはさっきのカフェに戻ってきた。さっきよりメンバーが減ったところを見ると、みんな調整に入っているんだろう。

「仕事熱心なのは分かったが、ああも突っぱねられたら私たちの入る余地は無さそうだな」

「これではふみちゃんのためにメンテナンスが居るのか、メンテナンスのためにふみちゃんが居るのか分かりませんわ……」

そう言うとソフィアは大きくため息をついた。

「それにしても気になるのは……あの膨大な量の装備品を一日で、しかも一人で調べつくすことができるのだろうか？」

「どうせ無理よ、明日になったら自分の間違いを謝ってくるに決まっていますわ」
そう言うと、本日二杯目のカフェオレに口をつける。

しかしあんなにプライドが高そうなクヴァレがそう簡単に頭を下げるだろうか。

「あら、亀ちゃんにわんこ、今日はもう上がりなの？」

声のする方をみると卯月が入り口に立っていた。背後には腰に工具をぶら下げた整備担当が二人付き添っている。

「どこかに行くのか？」

「ええ、装備の調整が終わったから外で実際に動かしに行くのよ。上の方針が変わっても私はこれまで通りだしね」

「そうか」

もう実地試験に行くメンバーが出始めたのか。私の中にじわりと焦りが広がる。

「ところで、どうして二人はここにいるのかしら？」

「新しいメンテ担当に追い出されてしまった。作業の邪魔だ、とな」

あの時はソフィアが私の代わりに怒ってくれたが、こうして思い返すとやっぱりカチンと来る。

「ふうん、ずいぶん手強いみたいね」

「卯月、そろそろ……」

卯月の隣にいた整備担当が腕時計に目を落としながら言った。

私たちは卯月を見送ろうと席を立った。その途端卯月が目を丸くする。

……しまった。いつも着ている服（装甲）を今日は付けてないんだった。慌てて体を手で覆い隠すと卯月がクスリと笑って言った。

「あらあら、さすがの亀もこれではスッポンね」

「むーっ、ふみちゃんの事を悪く言うのは許しませんわっ」

「……放っておいてくれ」

三者三様の言葉を吐いて卯月はその場を後にした。

「……あらっ」

卯月に別れを告げ、改めてソフィアに向き合くと、ソフィアが慌てた顔でポケットの中を探っている。

「ソフィア、どうかしたか？」

「帽子につけてた徽章を外し忘れちゃったみたいですね、多分あの時に……」ソフィアがうなだれながら言った。

クヴァレに向かって帽子……もといレーダーを投げつけた時か。

徽章はいわば身分証であり、それなくしては多くの部屋への立ち入りが制限されてしまう。

そして制御室には気難しいクヴァレが一人で淡々と整備点検を続けてることだろう。そんな中に身分証を取りにいったら何を言われるか分かったものじゃない。

「一緒に行こうか？」

「心配いりませんわ、手早く回収してきますから」

ソフィアが席を立つ。

「それではふみちゃん、また明日」

そう言って敬礼の真似事をすると、ソフィアは小走りでカフェを出ていった。

それから数日が経ったが、クヴァレは相変わらず無愛想で私たちと距離を置きたがり、私はそんなクヴァレにうんざりしていた。

そんな中、ソフィアは先日忘れ物を取りに行ってからどこか変わった気がした。それは見ていてすぐに分かった。あんなにクヴァレの事を嫌っていたソフィアがあの日以来悪口を口にしなくなったところか、調整室に籠りっきりのクヴァレに昼食を差し入れようと言い出すようになったのだ。

そしてクヴァレもいつも通りぶっきらぼうに「もう来るなよ」と言いつつも心から嫌というわけでは無さそうだった。

ソフィアの急な心変わりの理由を尋ねるタイミングがつかめないまま数日が経ち、その間にもクヴァレとソフィアは徐々に仲が良くなっている気がする。

何はともあれ確実にチームの空気が良い方向へ向かっている。これはおしろ喜ばしいことなのかもしれない。

しかし私はそれがどうしても不満だった。肝心のその空気に私が馴染めず、取り残されてると感じていたのだ。

なんとクヴァレはあの日宣言通り一日で全ての部品の点検を終えた。これにはとても驚かされた。しかしその後実際に装甲と補助アームを取り付けてから

の動作試験にはかなり長い時間がかかっていた。

クヴァレもどのくらいで終わるのか明言していないから、前回と同じ考えで行くならばクヴァレ自身にも進捗が分かりにくいのだろう。

そんな作業の大部分は腕や足、補助アームを少し動いては設定を変更し、また少し動いては変更の繰り返しである。一日何時間も点検が、もう三日も続いている。

卯月を始めとし他のメンバーも徐々に実地へ出て動き出しているというのに、自分だけ遅れているという事実が私の中に確実に焦燥感を募らせていた。

「まだ点検には時間がかかるのか？」

それは、何度目かの一言から始まった。クヴァレの指示で重心とバランスの測定をしているところだった。

「ああ、もうしばらくかかる」

クヴァレがいつも通り画面をじっと見つめながらぼそっと答える。相変わらずこちらには目もくれずに。

昨日までならそれで会話も終わったかもしれない。でも今日は色々な事が心の中でぐしゃぐしゃにかき混ざって抑えられなかった。

「まじめに聞いているのか？ もうしばらくとはあとどのくらいなんだ、毎日毎日手を動かさせ足を動かさせと……私はお前の操り人形ではないのだぞ」

しまった。言った後ではっとなった。すぐに胸が焼けるように熱くなる。

「あっ……」

謝ろうとした途端、データの打ち込みをしていたクヴァレが机を殴った。

「そんな事はわかってる。さっきから何だ、口を開けば愚痴ばかりで、おまえ一人を運用するのにどれくらい投資されているか考えたことがあるのか」

クヴァレが椅子を蹴飛ばして立ち上がる、と同時にソフィアが間に割って入った。

「苛立つ気持ちはわかるけど、仕事に感情を持ち込まないでちょうだい」

ソフィアの瞳が、私とクヴァレを交互にキッとらみつける。私はというですっかり落ち込んで泣き出したくなった。ちょっと機嫌が悪いだけで思ってもみないことを口にしてしまったのだ。

「……すまない、今日の私はどうかしているみたいだ」

そう言って装備を脱ぎ捨てると、扉へ向かう。

「ちょっと頭を冷やしてくる、作業はまた明日にしてくれないか」

クヴァレもソフィアも無言のままその場に立ちつくしている。あとは二人で良くやっててくれ。

扉が閉じる瞬間、小さな声が聞こえた。

「……分かった、調整する」

私はどうしてしまったんだろうか。今までは気にもとめなかったような小さなことに苛立って……。

外のベンチに座ってがっくり地面を眺めていると、誰かの近づく足音が聞こえた。ソフィアだったら嫌だな。どうやって追い返そうか、そんな事を考え出してしまふ。

「あら、亀ちゃん……」

ソフィアじゃない声にはっとなって顔を上げると、卯月が正面に立ってこちらを見下ろしていた。

「うづきい」

名前を呼ぼうとして声がうわずった。それと同時に涙が込み上げて目が熱くなる。悟られまいと慌てて頭を下げた。

「ちょっと亀ちゃん、どうしちゃったのよ。そんな泣きそうな顔して」

気づいた卯月が駆けよって頭に手を置いた。それと同時に張り詰めた糸が切れそうになったが、ぐっと押しこらえて波が引くのを待つ。歯を食いしばってじっとしていると、ようやく波が引いて落ち着きを取り戻した。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

「なぁんだ、泣いちゃうかと思ったのに……まあ、亀ちゃんらしいけど」

そう言うと卯月は頭のうえの手を離して隣に座り、諭すような声で言った。

「じゃあ、詳しく話を聞かせてもらえるかしら？」

ペリカンめ……。

「ふうん、そんな事があったのね」

卯月は私の話を黙って聞いていたが、最後まで聞くとふふっと笑った。

「意外だわ、まさか亀ちゃんの方からわんこにやきもちを焼くなんて」

「違う、仲間外れにされるのが嫌なだけだ」

「あら、でもわんこがクヴァレと仲良くしてるのが気に入らないんでしょ？」

「少し前まで文句を言ってたのに、気がついたら仲良くなってたから気に入らないだけだ」

「そう言うのをやきもちっていうんじゃないの？」

「……分からない」

私はソフィアにやきもちを焼いているのだろうか？

「でもわんこは違うと思うな」

「どうしてだ？」

「あの子は恋に恋するだけで、人に恋してるわけじゃないもの。それは亀ちゃんもよくわかってることでしょ？」

それについてはまったく同感だった。心変わりしたソフィアにおかっとしたのは、心の中でソフィアに限ってそんな事はないと思うところがあったからだ。そこまで考えるとずっと心が落ち着いて、私は今まで何に腹を立ててたんだろう、とさえ思えてきた。

「今度わんこに聞いてみれば良いじゃない、あなたの杞憂なだけかもよ？」

「そうか、そうだな」

「それに」

卯月が席を立つ。

「あの子があなた以上に好きになる人なんているのかしら？」

ふふふっと笑いながら建物に向かって歩き出す。

「待て、どういう意味だ？」

「亀みたいに甲羅にこもってないで、亀らしくどっしり構えてなさいって事よ」意味不明な事を言いながら卯月は建物の中に消えていってしまった。

「あっ、こんなところにいた」

それから数分後、ソフィアが駆けよって来た。卯月のおかげで大分楽になったとはいえ、ソフィアの声に心の奥がズキリと痛む。

「ペリカンにふみちゃんがここにいるって聞いたから」

ペリカンめ……絶対楽しんでるだろう。心の中でそう悪態をつきながら、下を向いたまま目も合わせられずに口を開く。

「クヴァレは良いのか？」

無意識に口をついて出た言葉に動揺した。どうしてこんな言葉が出てきたんだろうか、やっぱり卯月の言うとおりにソフィアにやきもちを焼いていたのか。

「うん、また忙しくなるからって追い出されちゃって」

「そうか、二人には迷惑をかけた」

「ううん、私はいいの」

あの、と言いかけて口を閉ざす。こんな時なんて言い出せばいいだろうか、言葉が見つからない。

「調子の悪い日くらい誰にだってあるわ、私だってたまにどうしても機嫌の悪い日があるし」

ソフィアが私の肩にぽんと手を置いた。

「ソフィアにも？」

「もちろん」

「ソフィアは、何をやっていても面白くないと感じる時、どうしてるんだ？」ソフィアとの付き合いは長いが、機嫌の悪いソフィアを見たことが私の中では一度もなかった。

「うーん」

しばらく考えるような声が聞こえた後、意外な言葉が返ってきた。

「私の場合はちょっとだけ行方不明になるかな。私はすぐに言葉や顔に出ちゃうから、ふらっと一人になって頭を冷やすの。そうしてカフェオレなんか飲みながら二十分もすればすっかり落ち着きを取り戻して、あとは気づかれないようにそっともとの場所に戻るのよ」

ソフィアが普段そんなことを考えているとは全く思わなかった。ソフィアの事をすべて知ったつもりになって機嫌を損ねた私が甚だおこがましい。

「あっ、でもその考えでいくと私はふみちゃんの『行方不明』を邪魔しちゃったことになるのかしら」

「いや、今日はソフィアの話が聞いて良かった。きっと明日には元通りになってると思う」

ごめんねと謝るソフィアに、やっと顔を上げ向かい合って話しをすることができた。

「よかった、じゃあ私も準備があるからまた明日ね」

そう言うとソフィアは私に背を向けて歩き出した。違う、本当は別の話がしたかったんだ。ソフィアとの距離が徐々に広がっていく、はやく呼び止めなければ。

私はとっさに立ち上がると、ありったけの声でソフィアの名前を呼んだ。

「ソフィアッ」

「わっ、な、なに？」

ソフィアが驚いて振り返った。その顔をみた瞬間急に心臓が強く打って息が詰まった。頭の中が真っ白になって何を言いたかったのかも思い出せない。

苦しい思いで息を吸って、やっと一言だけ吐きだした。

「その……クヴァレとは、何かあったのか？」

「えっ、どうして？」

きょとんとした顔でこっちを見つめるソフィア。

「どうしてって……最近クヴァレと仲が良いなと思って」

「うーん、仲がいいっていうのかな」

どちらかという相手とされていないとソフィアはうなだれたが、クヴァレのことはどうでもいい。ソフィアのクヴァレに対する感情だけが私の気がかりだった。

「最近昼食を届けたりとか、いろいろしてるじゃないか」

「あ、それはね。クヴァレがふみちゃんのために頑張ってるってことを知ったから、私も負けられないぞって思ったの」

「それは……記章を取りに戻った時か？」

「ええ、クヴァレは恥ずかしいからふみちゃんには内緒って言ってたけどね、別に恥ずかしがることでもないのに」

「クヴァレは、どんな風に頑張ってるんだ？」

「だーめっ、いくらふみちゃんでも教えられないわ、クヴァレの面子を立ててあげなきゃ」

「やっぱり仲が良いんじゃないのか？」

「あ、もしかして気にしてたの？」

「うっ」

しまった、詳しく聞き出そうとしたつもりがやぶへびになってしまった……。

「やっぱり、どうりでおかしいと思ったのよ、ふみちゃんの機嫌が悪いなんて」

「ち、違うっ、私はただ——」

そう言おうとした途端ソフィアが抱きついてきた。突然のことに驚いて固まる私。

「心配してくれてありがと。それとごめんね、ふみちゃんのためにやったつもりが逆に心配させちゃって」

「……私の方こそ要らない疑いをかけてしまった」

どうかしてる。これまでも幾度と無く抱きつかれてきているのに、今日はそれが嬉しい、救われたと思ってるなんて。

ソフィアの頭に手を置くと、嬉しそうに頬をすりよせてきた。背中越しに本当にわんこのしっぽが見えそうな気がしてきた。

「今日はゆっくり休んで、明日からまた万全で臨みましょう」

「わかった、また明日」

走り去るソフィアをぼうっと見送る。

「私の思った通りだったわね」

背後から聞こえた声にぎくりとして振り返ると、ちょうど植木から卯月がはい出してくるところだった。

「大体全部聞かせてもらったわ」

「いつの間に……」

卯月の事だからどこかで聞いてるとは思ったが、一体いつの間に草むらに入り込んだんだか。

「隙だらけの亀ちゃんに気づかれずに近づくことくらいたやすいことよ」

まるで自分の考えてる事などお見通しだという風に自信満々に言ってみせる卯月。そこまで私は弱っていたということか。

「卯月の言う通り私の考えすぎだったみたいだ。思い切って話をしてよかった」

「そうでしょ、亀ちゃんは考えすぎる癖があるんだから。もっと単純に考えればいいのよ」

「そう……かもしれないな」

言われてみるとまったくその通りだった。小さいことで悩むなんてそれこそ亀らしくない。

「それにしても」

卯月がにやりと笑う。

「ソフィアは確かにわんこだけど、実際のところ飼われてるのは亀ちゃんかもしれないわね」

……心外極まりない事だが言われてみるとまったくその通りだった。ソフィアの行動一つで揺れ動く自分が情けなくて、随分つまらないことで悩んでいたものだと思った。